

翌日越る山見て居たり秋の暮
嶮越しに見ても秋立渚かな
同 仙台 湖立

遅日時はおもふ事あるさくら哉
鍵裂きも知らず来て来る紙衣哉
同 都鳥 北鱗

近寄れは遠く成りけり梅の花
ちか道の新らしうなる長閑哉
同 同 淡交

舟守に教へられけり雪解みち
鶯の声を投込む小家かな
同 同 一鳳

はつ東風の障子にさはるゆるみ哉
傘かりる門は日のさす時雨哉
同 花巻 竜山

冬枯て瀧は見得けり柴の庵
鶏ははやあかりけりふゆの雨
同 同 月声

先無事て初日に向ふ袴かな
折くへた柴の埃りやゆきの朝
同 同 蓬舟

帆柱に見立し杉や木兔の声
杖突は合好のよきかみこ哉
同 同 柳蛙

坂下りるうちは聞えし神楽哉
蜘蛛の糸一筋曳や小六月
同 釜石 旦雪

爰らまで山のはしりや枯尾花
葉の付いた儘に梢の氷柱かな
同 同 南江

提て来て下には置す初かつほ
笠取て旅人通るのほりかな
盛岡 春岱

一散んにたつむら鳥や氷る声
朝までは大丈夫なり炭かしら
黒沢尻 玉之
一ノ戸 松 洩
八戸 常 丸

大尾

君恩を笠に着れば函谷に
鶏をおとろかすへき関は

もとより山坂もなし古稀五つ
越ぬれと思立事有て旅立

神達にいさなはれ百六十九里も
あらし風袖に吹しほらて東都に

まかり今はた帰路におもむく
かへるさや

無事て流る、
年を友

七十五童

寛 兆